

常行堂・法華堂（重要文化財）

この二つのお堂は、848年に僧侶の円仁（794～864）によって建てられた二つのお堂に代わって、1619年に建てられた。屋根付きの廊下で結ばれた両堂は、円仁が中国で学んだ瞑想の修行に使われていた。

二つのお堂のうち大きい方の常行堂では、九十日間、僧侶が中心の像の周りを歩きながら瞑想する「常行三昧」が行われている。常行堂の中央には、金剛界曼荼羅の一面に登場する四菩薩守られた阿弥陀如来像がある。五体とも孔雀に乗って蓮華座をしており、心の清らかさを象徴している。

法華堂は、文字通り「法華経堂」であり、三十七日間続く座位と歩行の瞑想「法華三昧」のために使用されている。

この二つのお堂は、建築的には赤塗りの屋根の様式が似ているが、「常行堂」は和風、「法華堂」は中国風のデザインである。これは、円仁が設計した京都延暦寺にも同じような二対のお堂がある。

現在、この常行堂は法要に使われている。